

句集を読む ⑧

三輪初子

『夜は昔の』山田真砂年(二〇二五年、角川書店)



表題の『夜は昔の』は、私には実に懐古的。著者山田真砂年とは、十八年前に閉店した亡夫と営業を続けてきた飲食店の常連としても、交流を戴いてきた縁など、表題の元句「新米や夜は昔の話して」は、郷愁を呼ぶ。

山田真砂年氏は昭和二十四年東京

都品川区生まれ。昭和六十一年「未来図」入会。未来図新人賞、俳人協会新人賞等受賞。令和二年未来図主宰鍵和田柚子主宰逝去後、結社誌「稲」を主宰として創刊。句集に「西へ出づれば」(花神社)「海鞘食うて」(角川書店)に次ぐ第三句集が本編である。(第四章構成)

第一章「この道」

この道も霞むあふみへつづきをり

ふるさとは真綿の重み月おぼろ

辛夷咲く山の向かうに山のあり

山笑ふ村にひとりの子の生まれ

秋風や首落ちやすき神の像

去年今年あがれぬほどに湯のぬるき

「あふみ」は近江の琵琶湖、万葉集から「海として崇められ東京の作者には、霞むこの道であるう。」「真綿の重み」の、これぞふるさとなのだ。村に子が生まれる慶びは「山笑ふ」が全て。辛夷咲く山の向こうの山に山頭火が? ぬるき初湯を上がりが心機一転の新年を。

第二章「たつたこれだけ」

母老いてたつたこれだけ梅千せる
万緑の泡立つほどに揺れてをり

血液のじわじわ重き残暑かな

八月の空の真下の草の罌

木枯や写楽の鼻が逃げてゆく

「たつたこれだけ」に強い母への思慕。泡立つ万緑に溺れてみようか。

「じわじわ」は流れる血液の音かもしれぬ。八月の草の罌が怖い。写楽の鼻は後世で何を嘆きつけたか。

第三章「母はまほろば」

暗黒を転がつてきて春の月

望の月吾を見詰むる母のゐて

かくも小さき母はまほろば天の川

かさぶたのごとき砂丘や梅雨の蝶

駱駝百頭杖に追はれて秋の風

暗黒の世界を越えての波瀾万丈の輝きがああ春の月とは。名月を仰がずひたすら我が子を見詰めるお母上。そんなお母様も小さくなられて何処のまほろばに御座すのか?

作者は北欧や西アジア等旅に巡じ「かさぶたのごとき砂丘」や「駱駝百頭」等を詠む。そして、貴重な言葉や「あとがき」に示す。「言葉ばかりが先走らず、実感を大事に詠みたい。虚構を描いても、そこに実感が宿り、リアリティーが滲むような俳句でありたい」。

老人を闇に忘れて年用意

むかしむかし一人遁走官女雛

食べこぼす母や菜の花蝶に化す

縁先に蟻の来てをり母曳きに

虚構は仮の虚であり、そこに実感が伝わるこそが俳句の命かもしれない。巻末の季語別の索引も格別のデザートである。更なる御盛栄と御健康を祈念し、深謝!